3

昭和二年（一九二七）の九月。午後。
再びシャンデーケンの山荘。居間には夥しい標本類とともにこの十年の間に描かれた野口の絵が数多く飾られている。
メリーが頭部に羽の飾りをつけてインディアンの衣装を着て座っている。
イーゼルを立てて彼女の横顔を描いている野口。
二人の間には静かで穏やかな時間が流れている。
野口は髪に白い物が目立つようになっており、いささか草臥れた印象。
彼は絵を描きながら小さく鼻歌を口ずさんでいる。

♪ 小原庄助さん　なーんで身上つーぶした
朝寝　朝酒　朝湯が大好きで
そーれで身上つーぶした
はァ　もっともだ～　もっともだ

メリー　今日は静かだわ。
野　口　ん？……ああ、そうだね。
メリー　電話が一度も鳴らない。そういえば昨日から鳴らないわね。水曜日まではあんなにうるさく掛かってきたのに。
野　口　電話線を外してしまったんだ。この山荘にいる間は静かに過ごしたいからね。
メリー　知らなかった。
野　口　大丈夫。ハイクの店に食料を注文する時にはすぐに繋いであげる。
メリー　そういえばハイクの奥さんが一昨日あなたのこと話してたわ。
野　口　へえ。何て？
メリー　先生はこの頃急に老け込んだみたいだって。
野　口　あまり嬉しくない評判だね。
メリー　だからあたし言ったのよ。ノグチは若い頃から滅多に眠らなかったから一日で二日分の歳を取っちゃったのよって。
野　口　ならオレはもう百を越えてる勘定だ。
メリー　そう。だからその割には若く見えるでしょって。
野　口　なるほど。そしてオレには五十も年下の若い妻がいるってわけか。あ

りがたいね。
メリー　でしょう？　人生なんてものの見方一つよ。

メリー、あくびをする。
野口は筆を動かしながら再び鼻歌を口ずさむ。

♪　小原庄助さん　なーんで身上つーぶした
　　朝寝　朝酒　朝湯が大好きで
　　そーれで身上つーぶした
　　はァ　もっともだ～　もっともだ

メリー　ねえ、その歌って何なの？
野　口　え？……歌？
メリー　さっきからずっと歌ってる。
野　口　え……ああ。子供の頃に流行った歌さ。
メリー　どんな意味？
野　口　大した意味はないよ。呑気な男がいてさ、その男はベッドの中と風呂

と酒が大好きで、全然働かないんだ。それで男の家がつぶれてしまったのもむべなるかなって歌さ。

メリー　楽しい歌ね。

野　口　そうかな。ろくでもない男の歌だよ。

メリー　でも楽しそうに聞こえる。あなた本当は自分でもそんなふうに生きてみたかったんじゃない？

野　口　フフ、そんな馬鹿な。

メリー　ううん、きっとそうなのよ。あたしには分かるわ。

野　口　いいよ。ならそういうことにしておくさ。

メリー　ねえ、あたしたち来年の夏は日本に行きましょうよ。あなたの御両親のお墓参りに。あたし見てみたいわ、ヒデが生まれた場所を。

野　口　日本には帰れないよメイジー。

メリー　どうして？

野　口　二十一で家を出る時にナイフで柱に文字を刻んだんだ。「世の中で成功するまでは二度とこの場所へは戻らない」ってね。

メリー　あなたはじゅうぶんに成功したじゃない。それにずっと前にも一度帰ってるでしょ、お母さんに会いに。あたしは連れてってもらえなかっ

たけど。

野　口　あの時はきみが行きたくないって言ったんだ。

メリー　あなたが連れて行きたくないって顔してたからよ。だからそう言ったの。

野　口　……分かったよ。考えておこう。今やってるトラホームの研究が成功したらあるいは帰れるかも知れない。

メリー　約束よ。

野　口　ああ。……少し疲れたな。休憩しようか。

玄関の呼び鈴が鳴る。

野　口　誰だろう？

メリー　ハイクの奥さんかも知れないわ。電話が通じないから御用聞きに来たのよきっと。

野　口　ならきみが出てくれ。一昨日よりも老けたと言われたくない。

メリー　この恰好で？　今度はあたしの気が違ったと思われるわ。

メリーが出て行く。
扉の開く気配あって声だけが聞こえる。

メリー　（声のみ）あら、どなた？
エブリン　（声のみ）申し訳ありません奥様。あたくし研究所で先生の助手をしているエブリン・ティルディンと申します。ドクター・ノグチはいらっしゃいますでしょうか。
メリー　（声のみ）どうぞ入って。中におりますわ。
エブリン　（声のみ）失礼します。

メリーとともにエブリン・ティルディン（三六）が入ってくる。
長身の理知的な女性。

野口　まさかきみだとは思わなかったよエブリン。どうしたんだね。
エブリン　申し訳ありません先生。何度もお電話したのですがどうしても繋がらなかったものですから。あたくし矢も楯も堪らなくなって。

野口　妻のメリーとは初めてだったね？
エブリン　お電話では何度か。初めましてミセス・ノグチ。
メリー　初めまして。何かの罰が当たったのね、初対面なのにこんな馬鹿げた恰好であなたと会うことになるなんて。
エブリン　本当にすみません。水入らずでご静養中のところに。
メリー　あたしは上に行ってるわ、よほど大切な急用でしょうから。
エブリン　いいえ奥様、もしよろしければここで一緒に先生を説得してくださいまし。
メリー　説得？　何を説得するの？
エブリン　先生がアフリカにお行きにならない様に。
メリー　うちの人アフリカに行くの？　今度は何をしに？
エブリン　もちろん黄熱病の研究ですわ。
メリー　あら、それはもう終わったんじゃなかったの？
エブリン　残念ながら西アフリカの黄熱病には先生のワクチンが効かないという研究報告が出されているのです。戦いはまだ終わったとは申せません。それにしても、よりによってアフリカだなんて。……あなたそんな場所へ行ったら死んじゃうわよ？

野口　死にはしないさ。ラゴスやアクラはイギリス領だし、研究所だってちゃんと出来てるんだから。

メリー　イギリス領のことならイギリスに任せておけばいいじゃないの。それに忘れたの？　あなたは今や糖尿病の上に心臓も悪い百四歳の老人なのよ？

エブリン　奥様、先生はまだ五十二歳です。

メリー　いいのよ細かなことは。とにかくそんな体じゃ無事に行き着けるかどうかだって怪しいもんだわよ。およしなさいな。

野口　大丈夫だよメイジー。今までだってちゃんと無事に帰ってきただろ？

エブリン　いいえ先生。今回だけはあまりに危険ですわ。あたくしは反対です。

（メリーに）実は三日前、研究所からアフリカに派遣されていたストークス博士も黄熱病で亡くなられたばかりなのです。

メリー　まあ、お気の毒に。

エブリン　そんな危険な場所に今度は先生がお行きになると聞いて、あたくしも心配で心配で、これは絶対にお止めしなければいけないと思って。

メリー　ほら、あなたの可愛いエブリンもこう言ってるわよ？

野口　ストークス君のことはわたしも痛ましく思う。彼はわたしのワクチン

を否定してきた張本人だった。もし彼がワクチンを接種していたら、たとえ罹患してももっと軽い症状で済んでいたかも知れない。

エブリン　アカゲザルの実験結果からはその可能性は極めて低いと言わざるを得ませんわ。

野口　だが可能性そのものまでは誰にも否定出来ないはずだよ。いずれにせよこれはわたしが直接行って確かめるべき問題だと思う。

エブリン　先生、あたくし失礼を承知で申し上げます。先生は焦っておられます。

野口　焦る？　わたしが何に焦っているというのかね。

エブリン　財団本部の名誉と恐らくは先生御自身の名声を回復なされることにです。先生は御自分がお行きになれば必ず病原体を発見出来るとお考えです。ですがあたくしには……ごめんなさい……今度ばかりはそれが無理だと思えてならないのです。

野口　エブリン、最初に断わっておくが今のわたしには財団の面子だとか自分の名誉だとかそんなことにはまったく関心がないよ。

エブリン　たとえそうでも、みすみすお名前を汚すことはありませんわ。残念ですが今や世界中に先生が失敗なさるのを待ち望んでいる学者たちがいるのです。

野口　だから彼等の望み通りに失敗をしに行く必要はないと？

エブリン　そうです。アフリカ黄熱病の病原体は、やはり一部で言われている通り濾過性のウィルスだと思います。イクテロイデスにせよイクテロヘモラギエにせよ、アフリカではいまだまったく発見されていません。その事実こそが何よりの証拠ではないでしょうか。

野口　確かにきみの言う通りわたしが行っても結局は何も発見出来ずに終わるかも知れない。だが同時にわたしになら何かが見つけられるかも知れない。それは行ってみなければ分からないことだよ。わたしだってウィルスの存在を決して否定するものではない。しかし発見出来ないものをすべてウィルスだと片付けるべきではないのだ。濾過器の穴の大きさと顕微鏡の分解能力の限界は必ずしも一致するものではない。濾過器を通過しても顕微鏡で見える微生物だって存在するのだ。現にイクテロイデスもその一つだった。たとえ濾過器を通過しても、その先の見えるか見えないかは、実際はもっともっと技術の問題だよ。少なくともわたしはそう思っている。そしてわたしには誰よりもその技術と経験があるのだ。ならば出かけて行って挑んでみる値打ちも少なからずあろうというものじゃないか。違うかね？

エブリン　それでも可能性から言えば。

野口　（彼女を手で制して）それだけじゃない。いいかねエブリン、大事なのは、自分には誰かを救える可能性があるのにその可能性に懸けてみないのは一人の人間として間違っているということだよ。このことをよく考えてみてくれ。ただその土地に生まれたというだけで絶望的な宿痾に苦しむ人々が現にいるのだよ。発症すれば為す術もなく七日後の死を待つしかない人々が、今この瞬間にも彼の地には大勢いるのだ。彼らがその絶望からたとえわずかでも希望を見い出せた時の喜びと安堵の顔を、きみは見たことがあるかね？……わたしはエクアドルで見たよ。メキシコで見た。ペルーで見た。ブラジルで見た。今のわたしはそういう人々の為に力になりたいというだけなのだ。個人的な名声や財団の名誉などもはやどうでもいい。ただ純粋に彼等を救いたいだけなのだ。どうか分かって欲しい。

間。

エブリン　（うなずく）分かりました。ではせめてあたくしも御一緒に行くこと

をお許しください。アフリカの研究室は恐らくこれまでで最も条件が過酷ですわ。少しでも先生の研究が安全かつ円滑に進むようあたくしにお手伝いをさせてください。

野口　それは無理だよエブリン。きみには黄熱病を実際に扱った経験がない。それこそ危険極まる行為だ。それにきみにはわたしの留守中もトラホームやオロヤ熱の研究を継続するという大事な仕事があるのを忘れたかね？

エブリン、涙がこみ上げて両手で顔を覆う。

エブリン　……奥様、何とかおっしゃってください。このままでは先生は本当にアフリカに行ってしまわれます。

メリー　（タメ息）悪いけど……あなたが泣いて見せても止められないものをあたしが何とか出来るはずないわ。あたしが泣いたり喚いたりするのには夫は馴れっこだもの。ヒデはきっと自分のしたい様にするでしょう。残念だけどあなたもあきらめて。

野口　すまないエブリン。きみの気持ちだけは嬉しく思うよ。遠い所までわ

ざわざ来てもらって悪いが、今夜きみをこの山荘に招待するわけにはいかない。わたしの車で駅まで送ろう。

エブリン、涙を拭って顔を上げる。

エブリン　いえ、タクシーを食料品店の前に待たせてあります。帰りの切符も購入済みですのでどうか御心配なく。

野口　さすがだ。きみの仕事ぶりはいつも完璧だ。その調子でわたしの留守中もしっかり頼むよ。

エブリン　もしあちらであたくしが必要だと思われた時には直ぐに電報でお報せください。あたくしいつでもおそばに参りますわ。

野口　ありがとう。

エブリン　では失礼いたします、奥様。

メリー　せめて珈琲くらいと思ったけれど。

エブリン　ありがとうございます。そのお気持ちだけで。

エブリン、足早に退場する。

メリーは彼女を玄関まで送って戻ってくる。

メリー　……いつ行くの？

野　口　準備が整い次第。おそらく来月の終わりくらいになるだろう。

メリー　そう。……普段は冷静な彼女が泣いて止めるくらい今度は危ない仕事というわけね。

野　口　黙っていてすまなかった。この山荘にいる間はきみに余計な心配をさせたくなかった。だが、どうか分かって欲しい。

メリー　知らなかったわ。あなたがそんなに人類の為に生きてた人だったとは。

野　口　皮肉はよしてくれ。少しずつだよメイジー。少しずつオレは変わったのだ。つまり……順番が回ってきたんだよ。

メリー　順番？

野　口　オレは今まで本当に大勢の人間に助けられてここまでやってきた。今度はオレが誰かを助けてその借りを返す番なのだ。世の中はそういう仕組みになってるんだよ。

メリー　そうね。あなたは誰かを助けて自分の借りを返す。そしてあたしは独りぼっちになるわけね。あたしの貸した分はいったい誰が返してくれ

るの？

メリー、野口に背を向けて肩を震わせる。

野　口　頼むよメイジー、泣かないでくれ。オレを行かせてくれ。

メリー　行くのはあなたの勝手。泣くのはあたしの勝手だわ。

彼女は静かに泣き続ける……。

やがて、野口がポツリポツリと語り始める。

野　口　……オレの母親は強い人間だった。生活そのものが戦いだった時代に生まれて、その戦いを死ぬまで戦い通した。六つの歳から年老いて死ぬまで、ひたすら家族を養う為に働きづめに働き続けたんだ。オレには畑仕事の手伝い一つさせなかった。そんな暇があるなら勉強しろと言った。うんと勉強して偉くなれ、偉くなることが世の中に対する復讐だと教えた。オレはその教えの通りに死にもの狂いで勉強したよ。あれほど完璧な自己犠牲を毎日見せつけられたら他に選ぶ道などなか

った。とにかくとてつもなく強い人だったんだ。……そんな母がただ一度だけ弱音を吐いた。きみと結婚してしばらくした頃だ。このオレに帰って来て欲しいという切々たる手紙を寄越した。いつかきみにも見せたろう？　信じられるかい？　彼女はあの一通の手紙を書く為だけに読み書きを覚えたんだよ。……だがオレは帰らなかった。母の手紙に対して片々たる葉書の一枚さえ書いてやらなかった。本音を言えば、二度とあの家には帰りたくなかったからだ。不人情だと詰られてもいい。あの貧しさと息苦しさの中にはもう二度と戻るものかと密かに決めていたんだ。……そのうち見かねた友人の一人が母の写真を撮って送ってくれた。そこには驚くほど歳を取った弱々しい母が写っていた。オレは胸を衝かれた。今度はどうしようもなく猛然と母に逢いたくなった。……一度きりだ。これが最初で最後だぞ。何度も自分にそう言い聞かせて日本に戻った。……あの時きみを連れて行かなかったのは母を悲しませたくなかったからだよ。きみとの結婚は日本の誰にも知らせていなかった。きみを見れば、彼女は息子がもう自分の元へ戻る心算がないことを一目瞭然にして知るだろう。きみには申し訳ないと思ったが、年老いた母親にそんな思いをさせることが辛かった

んだ。……十五年ぶりの再会を母はとても喜んでくれた。オレも嬉しかった。でも……猪苗代の懐かしい風景の中にいる間、オレは内心ずっと冷や冷やしていた。このままもうアメリカには帰るなと、このまま自分と一緒にこの家で暮らしてくれと、母がいつそれを言い出すかとずっと心配だった。その時には何と言い訳しようかと頭の中ではそればかりを考えていた……。

野口、話すうちに思いが溢れてしまい、ここから会津弁となる。

野口　……母ちゃん、すまねーなシ。オレはまだまだ志半ばだ。まだこの家さ帰っては来られねーんだ。母ちゃん、すまねーなシ。分かってくんつぇ。

メリー、振り向いて野口を見る。

野口　そだな言い訳ばかり頭の中で考えてたオラに母ちゃんはこう言ったな

レイ。「おめの元気な顔さ見てオレはもうすっかり気が済んだから。したからおめは早くアメリカさけーれ。おめはこだな所さいつまでもおってはなんねー。早くニューヨークさ戻って、自分の仕事で世の中の役さ立て」って。……母ちゃん、あんたはやっぱり強え人だったなー。あん時どんな思いでそだなことさしゃべったんだ？……母ちゃん、オラはもう母ちゃんに孝行さ出来ねーよ。いくらしたくたって出来ねーよ。したからオラは人さ助けっからな。母ちゃんに貰った分は、人さな、それで堪忍してくんつぇ。

……野口、ふと我に返る。
メリーが彼を見つめている。

野　口　……すまない。知らない間に日本語でしゃべってた。

メリー、首を振る。

メリー　一つ約束して。
野　口　何だい。
メリー　必ずアフリカから無事に戻って……そしてあたしを日本に連れてって。
野　口　……。
メリー　あなたが生まれて育った場所を、あたしにも見せて。
野　口　……ああ、分かったよ。
メリー　きっとよ。約束よ。
野　口　……ああ、約束だ。

メリー、元の椅子に掛けてポーズを取る。

メリー　さっきの歌、また歌って。

野口、キャンバスの前に戻って絵筆を取って……しばし考える。

野　口　……いや、今度はきみが歌ってくれ。……きみの国の歌を。

メリー　……いいわ。

彼女は静かに『ダニー・ボーイ』を歌いだす。
野口は再び絵筆を動かす。
舞台は徐々に溶暗して、二人の姿だけが浮かび上がる……。
と……歌が途切れる。

奥住、客席に向かいて立つ……。

奥住　昭和二年の十月、野口博士は西アフリカ、ガーナのアクラに向けて旅立ちました。彼の地では実に九百頭を超えるサルを使って黄熱病の研究に没頭されましたが、帰国寸前になって黄熱病に感染。昭和三年五月二十一日に逝去せられました。……享年五十二歳でありました……。

奥住の姿、消える……。
メリー、再び歌い継ぎ……歌が終わる。
しばしの沈黙あって……やがて男が言う。

野　口　……愛してるよメイジー。

女が応える。

メリー　……あたしもよヒデ。

野口の姿、プツリと消える……。
闇の中にメリーの姿だけが残る……。

……幕が静かに下りてくる。